

熊本洋学校とジェーンズ、熊本バンド(下)

藤本 誠

四 儒教からキリスト教信仰へ

儒教主義を標榜して反対していた小崎弘道を始め、儒教的教養に基づく思想を倫理的信条としていた洋学校の生徒達は、如何にしてキリスト教信仰に至ったのか。隅谷三喜男は、「その最大の要素となっているものは、一方では陽明学的教養であり、他方では明治五年以降の開明的風潮であった」と指摘している。内村鑑三が『代表的日本人』で陽明学について言及した「¹西郷隆盛」の一節を引用して、「この陽明学は反封建闘争において積極的な役割を演じたのみならず、キリスト教理解に対しても、『その道筋をまっすぐにする』²役割を果たしたのである」と、隅谷は主張している。さらに「陽明学系統の『実学』を説いた横井小楠の弟子であり、熊本バンドの一員である海老名弾正」³のキリスト教信仰に至る次

のような経緯を紹介し、「熊本バンド三十五名は、すべてこの実学的教養の中で育てられたものであった」と論じている。⁴

「予が、基督教へと向つて、難関を切抜けた



1 同志社第8代総長時代の海老名弾正(昭和3年10月3日:九州学院にて)

のは、実学的見地を胸に抱いてゐたからである。朱子学は、親を二度諫めて、聞かれざれば、泣いて従ふと教へたが、実学は、良心を基本として天下国家を論じたから、天下国家のためには、親に背いても、進み行く活路があつた。天が、我が心を知り給ふ。『近思録』に、『君子は、常に終日天に在るに対すべし』と記してある。他の所には、『敬せざる勿れ。以て、上帝に対すべし』とも記さる。天を上帝と云へば、考方が具体的になる。『論語』に曰く、『罪を天に獲れば祈る所なし』と。横井小楠は、『宋の朱子』から出発して、『四書』に遡り更に『五経』に至つて、遂に天に到達した。天を、上帝に人格化し、天が我が心を見、天が我を保護する。『書経』に、『天の明命を顧る』とある。小楠曰く、『堯舜三代の心を用うるを見るに、其天を畏ること、現在天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く。動容周旋、総て天帝の命を受くる如く、自然に敬畏なり』云々と。予をして、天に向はしむる指南となつた。(中略)「かくて基督教を知つた時」また儒教でいふ上帝、旻天と、基督教でいふ神とは、同じでないか。結局は、同じ所に帰着するのだと思つた。朱子は、理を説いたが、小楠は、これでは足りない、上帝を以て、

実在として、客観視した。『詩経』では、敬を教へるが、この敬とは、客観的実在に対しての敬である。『書経』には、『天の明命を顧る』とある。小楠のいふ上帝と、科学でいふユニヴァサル・マインド(注・universal mind・普遍的精神)とは、同一である、と斯う考へて、予の思想は纏まつた。予の外にも、斯う考へた者がゐた

海老名弾正は基督教の神髓を知ることによつて、小楠・実学党の陽明学における上帝と基督教の神とを重ね、同一視するに至つた。儒教・陽明学を昇華し普遍化した基督教に行き着いたのである。



2 同志社第8代総長解任後の海老名弾正(熊本洋学校3回生)と遠山参良院長(熊本洋学校5回生)
(昭和3年12月8日:九州学院にて)

こうした海老名を始めとする熊本バンドの基督者の確信は、祈りによる神との邂逅と対話により信仰へと至る。ジェーンズはキリスト教神学には通じていず、その聖書会は英語聖書の講読会で講義には至らなかつたが、金森通倫も回顧しているように、ジェーンズの祈りは感涙を伴うほどの熱誠にあふれていた。聖書講読会に出席した者達は、ジェーンズの祈りを通じた篤い信仰心に打たれた。海老名弾正は、次のようにその体験を述べている。

「明治八年三月の第一土曜日の夜は、予の生涯にて最も大関係のあつた夜である。予は、今まで精神上の苦悶を経て、神の存在を認めて来た。唯だ解決しない所は祈禱である。然し祈禱を認めないから、神を認めても、神との縁が結ばれなかつた。土曜日の夜、予は何時もの如く、聖書を輪読せんが為、ジェーンズの熱心な祈禱の態度を見て、驚いてゐた。その夜、ジェーンズの態度は何時もと異なり、我々が円座した時、『レット・アス・プレイ。スタンド・アツプ』と云つて、立ち上つた。何時もは、立つた事がなかつた。ジェーンズの命令は、宛も権威あるもの、如く、我々は拒む事ができなかつた。皆が立ち上つた。予は平素の疑問を懐いて、独り

躊躇して、立たなかつた。祈る気もないのに立つは、先生を欺くのだ。それとて、命に背くわけにも行かず、激しく苦悶した。その時忽宛として、神に対して、感謝する気になつた。あゝ神への感謝は当然である。親の恩に感謝し、君恩に報いんと志す者が、何ぞ上天に感謝せざるべき。予は独り遅れて立ち上り、始めて感謝の祈禱を捧げた。(中略) ジェーンズは、聖書を讀み終ると、莊嚴なる態度を以て、『今夜は、祈禱に就いて一言したい』と述べた。予はかねてより聴きたい題目であつたから、満腔の熱心を以て、耳を傾けた。ジェーンズは肅然として曰く、『祈禱は、我々の職分である。創造者に対するオブリゲエション(注・obligation・義務)である』と述べた。職分とは、予にとり霹靂一撃であつた。窓から部屋の中へ、光明が来たやうに感じた。雷が頭上に落ちて、予は微塵に砕けた心地した。あゝ、祈禱は職分であつたか。私は、職分を怠つてゐましたか。祈禱が職分なら、膝を折り、骨を砕いても、祈らねばなりません。(中略) ジェーンズは、『第二に、祈禱は神との交りである』と云つた。予は驚愕した。神との交りとは、何と有難いものではないか。今まで予は、智者識者との交りを求めた。天子

様の御言葉を戴きたかつたが、親しく上帝に交り得るとは、何と高大なる恩徳ではないか。神は宇宙の主宰である。これと交はるのが祈祷であるかと、平身低頭してゐた。予の魂は青草が慈雨に浴する如く、伸び上がった。始めて神を仰いだ。(中略)神と予との間に、電線がかけられた。何事でも、神に伺ひ、神意を旨とするに至つた。予は神の僕となり、君臣の關係が、神と自分との間に成立した。この体験を、聖書にいふ新生と見た。予は基督の従者となり、新しい人に成つた」

熊本バンドの基督者達は、この海老名の信仰体験と同様の体験をしたはずである。謂わば、熊本でのプロテスタント信仰における最初の回心の出来事と言つてよい。

五 花岡山結盟と奉教趣意書

こうした機運の中で、一八七五(明治八)年の春、クリスチャン軍医・佐々木大尉が熊本鎮台に赴任し、ジェーンズに日曜礼拝の執行を依頼に来た。ジェーンズは大いに喜び、早速実行に移すことになり、海老名喜三郎(弾正)を始めとする七、八人が出席して、

熊本で最初の礼拝が行なわれた。

海老名の回想によれば、日曜礼拝はジェーンズ宅で九時に始まり、「第一讚美歌(英語)、祈祷、聖書解説兼祈祷、之にて十時半乃至十時五十分、讚美歌(英語)、説教、説教中午砲を聞くことも屢々あつた」という。午砲(ドン)とは明治五年以来、熊本城内の午砲台で一五七砲を撃つて、正午の時刻を知らせたものである。ジェーンズは、長いときには礼拝が三時間にも及ぶ大説教をすることもあつたのである。礼拝が終わると寄宿舎に帰って昼食をすませ、それから同輩相携えて花岡山に登り、祈りあうのが慣例となつた。山上で互いの信仰について語り合い、議論を闘わし、「鐘懸松」の下にひざまずいて祈りあつた。ここでの祈祷会を「天拝会」と呼んだ。こうして聖書講読会や礼拝に出席する者達の間で、次第に信仰の気運が高揚してきた。小崎弘道は、次のように回顧している。

「明治八年の冬季休業の頃には基督教を信ずる者既に三四十人にも及び、連夜の祈祷会と聖書研究会が催され、熱心な人は徹夜の祈をするなど其状態は恰も狂へる如くで、中には寒中に信仰鍛錬の為と称して冷水を浴びる者もあつた。生徒の多数は宗教の外何事をも思はず、連



3 熊本洋学校生徒 (明治8年6月26日撮影)
 前列向って右より：宮川経輝、小崎弘道、山崎為徳、
 伊勢 (横井) 時雄
 後列向って右より：由布武三郎、海老喜三郎 (弾正)、
 金森通倫、市原盛宏、和田正修

日連夜会合を行ひ、新年となつて十日より授業
 が開始されても静に教室に落着いて学ぶ者は少
 く、宛然^{えんぜん}リバイバルの様な有様であつた。

まさに熱狂的なりバイバルとなつた。しかし、洋
 学校の生徒はキリスト教反对者が多数を占め、反对
 派は洋学校からキリスト教信奉者を追放する運動を
 始めた。神風連も不穏な動きを見せ始めていた。そ



4 hymn 「Jesus Loves Me」を英語で
 歌った

うした状況下で、奉教結盟を實行し、キリスト教信
 仰者の団結を図ることとなつた。海老名弾正、宮川
 経輝、横井時雄、金森通倫らが誓約の主要を示し、
 坂井禎甫と古莊三郎が誓約文の起草を行なつた。
 一八七六 (明治九) 年一月三〇日の日曜日、いつ
 ものように礼拝を済ませた午後、意を決した洋学校
 の生徒四〇名ほどが聖地・花岡山に三々五々登り、
 鐘懸松のほとりに陣取つた。時は夕刻、熊本バンド
 結成の天拝会が開催されたのである。

まず、かねてジェーンズの礼拝でよく歌つた讚美
 歌「Jesus loves me (主われを愛す)」を英語で合唱し、

横井時雄が「ヨハネによる福音書」第一〇章の「イエスは良い羊飼いの」箇所を、ジェーンズからもらった英語の聖書で読んだ。そして、祈りを捧げると、

418 第四百十八 Jesus Loves Me (777) (Cant.)
Jesus loves me, Ah! Jesus I love so
主はわれを愛す、愛さぬことを知らず、
之に由りて愛さぬことを知らず、
ハチ一書三章十六節

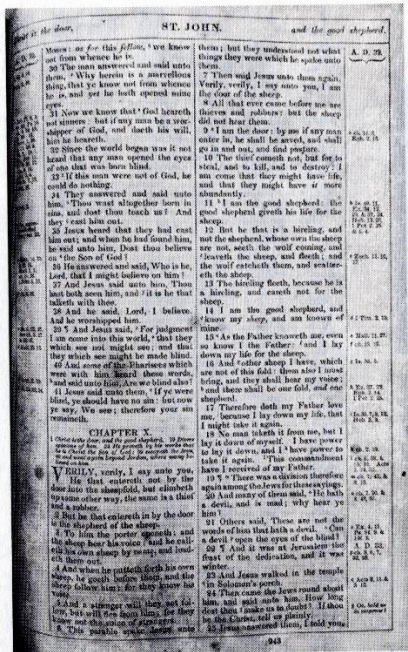
一 主われを愛す 主はつよけれど
二 われよわくとも おそれのあらじ
三 わが主ニヌ わが主ニヌ
四 わが主ニヌ われを愛す
五 わが主ニヌ われを愛す
六 わが主ニヌ われを愛す
七 わが主ニヌ われを愛す
八 わが主ニヌ われを愛す
九 わが主ニヌ われを愛す
十 わが主ニヌ われを愛す
十一 わが主ニヌ われを愛す
十二 わが主ニヌ われを愛す
十三 わが主ニヌ われを愛す
十四 わが主ニヌ われを愛す
十五 わが主ニヌ われを愛す
十六 わが主ニヌ われを愛す
十七 わが主ニヌ われを愛す
十八 わが主ニヌ われを愛す
十九 わが主ニヌ われを愛す
二十 わが主ニヌ われを愛す
二十一 わが主ニヌ われを愛す
二十二 わが主ニヌ われを愛す
二十三 わが主ニヌ われを愛す
二十四 わが主ニヌ われを愛す
二十五 わが主ニヌ われを愛す
二十六 わが主ニヌ われを愛す
二十七 わが主ニヌ われを愛す
二十八 わが主ニヌ われを愛す
二十九 わが主ニヌ われを愛す
三十 わが主ニヌ われを愛す
三十一 わが主ニヌ われを愛す
三十二 わが主ニヌ われを愛す
三十三 わが主ニヌ われを愛す
三十四 わが主ニヌ われを愛す
三十五 わが主ニヌ われを愛す
三十六 わが主ニヌ われを愛す
三十七 わが主ニヌ われを愛す
三十八 わが主ニヌ われを愛す
三十九 わが主ニヌ われを愛す
四十 わが主ニヌ われを愛す
四十一 わが主ニヌ われを愛す
四十二 わが主ニヌ われを愛す
四十三 わが主ニヌ われを愛す
四十四 わが主ニヌ われを愛す
四十五 わが主ニヌ われを愛す
四十六 わが主ニヌ われを愛す
四十七 わが主ニヌ われを愛す
四十八 わが主ニヌ われを愛す
四十九 わが主ニヌ われを愛す
五十 わが主ニヌ われを愛す

6 『讚美歌』418 (明治43年1月22日発行、教文館) 編輯代表者は小崎弘道と別所梅之助: 「Jesus Loves Me」の和訳

Children and Youth.
JESUS LOVES ME. 7.
W. B. HEALING.
309 ○ 第三百九 幼児青年 聖歌集を愛す

一、エス われを愛す 聖書にぞしめす
二、たよれわがとも 羊のみめくみに
三、わが主ニヌ われを愛す
四、わが主ニヌ われを愛す
五、わが主ニヌ われを愛す
六、わが主ニヌ われを愛す
七、わが主ニヌ われを愛す
八、わが主ニヌ われを愛す
九、わが主ニヌ われを愛す
十、わが主ニヌ われを愛す
十一、わが主ニヌ われを愛す
十二、わが主ニヌ われを愛す
十三、わが主ニヌ われを愛す
十四、わが主ニヌ われを愛す
十五、わが主ニヌ われを愛す
十六、わが主ニヌ われを愛す
十七、わが主ニヌ われを愛す
十八、わが主ニヌ われを愛す
十九、わが主ニヌ われを愛す
二十、わが主ニヌ われを愛す
二十一、わが主ニヌ われを愛す
二十二、わが主ニヌ われを愛す
二十三、わが主ニヌ われを愛す
二十四、わが主ニヌ われを愛す
二十五、わが主ニヌ われを愛す
二十六、わが主ニヌ われを愛す
二十七、わが主ニヌ われを愛す
二十八、わが主ニヌ われを愛す
二十九、わが主ニヌ われを愛す
三十、わが主ニヌ われを愛す
三十一、わが主ニヌ われを愛す
三十二、わが主ニヌ われを愛す
三十三、わが主ニヌ われを愛す
三十四、わが主ニヌ われを愛す
三十五、わが主ニヌ われを愛す
三十六、わが主ニヌ われを愛す
三十七、わが主ニヌ われを愛す
三十八、わが主ニヌ われを愛す
三十九、わが主ニヌ われを愛す
四十、わが主ニヌ われを愛す
四十一、わが主ニヌ われを愛す
四十二、わが主ニヌ われを愛す
四十三、わが主ニヌ われを愛す
四十四、わが主ニヌ われを愛す
四十五、わが主ニヌ われを愛す
四十六、わが主ニヌ われを愛す
四十七、わが主ニヌ われを愛す
四十八、わが主ニヌ われを愛す
四十九、わが主ニヌ われを愛す
五十、わが主ニヌ われを愛す

5 『基督教聖歌集』309 (明治28年7月発行、メソヂスト出版会) 遠山参良院長愛用の讚美歌: 「JESUS LOVES ME」の和訳



7 ジェーンズが授与した『聖書』の「ヨハネ福音書」10章。7節～18節「イエスは良い羊飼いの」を英語で読んだと思われる

古荘三郎が立って「奉教趣意書」を読み上げた。その後、金森通倫の司会に促され、一同の口から次々と祈りが湧き上がり、三五名が署名したのである。⁽¹³⁾

奉教趣意書の原文は次の通りである。

余輩嘗て西教ヲ学ブニ頗ル悟ル所アリ。爾後之ヲ讀ムニ益々感發シ、欣戴措カズ。遂ニ此ノ教ヲ皇国ニ布キ、大ニ人民ノ蒙昧ヲ開カント欲ス。然リト雖モ、西教ノ妙旨ヲ知ラズシテ頑乎旧說ニ浸潤スルノ徒未ダ少カラズ、豈ニ慨嘆ニ堪ユベケンヤ。此ノ時ニ当リ苟モ報國ノ志ヲ抱ク者ハ、宜シク感發興起シ生命ヲ塵芥ニ比シ、以テ西教ノ公明正大ナルヲ解明

スベシ。是レ吾曹ノ最モ力ヲ竭スベキ所ナリ。故ニ同志ヲ花岡山ニ会シ、同心協力シテ此ノ道ニ従事セシコトヲ要ス。

一、凡ソ此ノ道ニ入ル者ハ、互ニ兄弟ノ好ヲ結び、百事相戒メ相規シ、悪ヲ去リ善ニ移リ、以テ実行ヲ奏ス可シ。

一、一度此ノ道ニ入りテ実行ヲ奏スル能ハザル者ハ、是レ上帝ヲ欺クナリ。是レ心ヲ欺クナリ。如此者ハ必ズ上帝ノ譴罰ヲ蒙ル。

一、方今皇国ノ人民、多ク西教ヲ拒ム。故ニ我徒一人此ノ道ニ背クトキハ、衆ノ謗ヲ招クノミナラズ、終ニ吾徒ノ志願ヲシテ遂ゲザラシムルニ至ル。勤メザル可ケンヤ。欽マザル可ケンヤ。千八百七十六年第一月二十日 日曜日 誌トナシ。

そして、この誓約文の後に三五人の署名が横一列に連記されている。

署名した者は、次の熊本洋学校生たちである。

宮川経輝 古荘三郎 岡田松生 林治定 不破唯次郎 由布武三郎 大島徳四郎 蔵原惟郭 金森通倫 吉田萬熊 辻豊吉 亀山昇 海老名喜三郎 浦本武雄 大屋武雄 両角政之 野田武雄 下村孝太郎 北野要一郎 加藤勇次郎 原井淳太 紫藤



8 奉教記念会 (2010年1月30日) 花岡山「奉教之碑」前で花岡山結盟から134年後も奉教記念会が開催された。奨励者：原誠教授(同志社大学神学部)とこの年同志社大学に進学が決定した九州学院高校生たち

章 松尾敬吾 金子富吉 古閑義明 上原方立 徳富猪一郎 森田久万人 伊勢時雄 浮田和民 坂井禎甫 市原盛宏 川上虎男 鈴木萬 今村慎始

彼らはキリスト教の教えを我皇国に布教し、旧説に縛られている人民の蒙昧を開き、生命を惜しむことなく我国の開明に努めることを、上帝に対し誓約したのである。ゴッドは、当時日本の神祇信仰の対象としての意味

が強かった「神」ではなく、儒教の「上帝」と記されている。謂わば、キリスト教への集団入信を誓う結盟であった。

まだキリスト教が邪教扱いされ排耶蘇の風潮が根強かった熊本で、この結盟は計り知れない衝撃を与えた。



9 徳富健次郎『竹崎順子』（遠山参良院長に贈呈された初版本）

後に徳富健次郎（蘆花）は『竹崎順子』で次のように記している。

「これは晴天の霹靂（^{へきれき}）です。西洋文化の吸収に先駆けた実学社中でも、これには全く不意をうたれてしまいました。而して其大それた耶蘇教の信奉者中に、横井小楠の嗣子（^{しし}）時雄が居た事は、社中一同の驚駭（^{きやうがい}）と落膽（^{らくたん}）でありました」

邪教であるキリスト教を蔓延させたという風評と誤認によって斬殺された小楠の、事もあろうにひとり息子の伊勢時雄（^{いせときゆう}）が、キリスト教を信奉したのである。この結盟は、署名した者の一家一族は当然のこと、竹崎茶堂を始め小楠門下の進歩的な実学派の連

中をも震撼させた。時雄は座敷の一室に監禁され、母・つせ（小楠の妻）は自害を覚悟して棄教を迫った。金森通倫は座敷牢に入れられ、同じく棄教を強要された。

花岡山の結盟がなされた同じ日に、洋学校内部の儒教信奉者たちはキリスト教信奉者に対抗して細川旧藩公別邸のある水前寺成趣園に結集して反耶蘇の氣勢をあげたが、進歩的な実学派の洋学校内部からさえ、キリスト教に対して排斥・追放の運動が起きるほど、当時は封建的儒教主義が根強かった。そうした精神風土の熊本に開明的な洋学校が設立され、画期的な教育によって熊本バンドを始めとする多くの逸材が輩出されたのである。近代日本におけるキリスト教受容のひとつのかたちがある。

六 ジェーンズからの受洗と回心

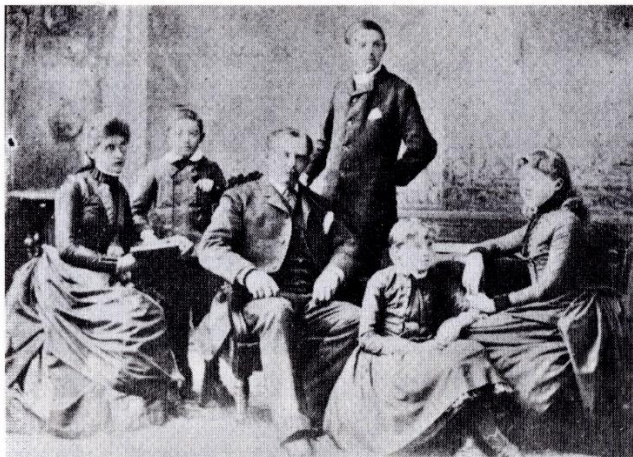
奉教の意を表明した洋学校生に対して激烈極まらないさまざまな迫害がなされたが、それも次第に沈静化してゆく。それほど一同の結盟の決意が揺るがぬものだったのである。

彼らを導いたジェーンズは宣教師としての資格はなかったが、自ら洗礼を授けた。ジェーンズから受洗した小崎弘道は、次のように記している。



10 ジェーンズより受洗した洋学校生徒 22 名 (明治 9 年 4 月撮影)。前列向って右より：不破唯次郎、千手常次郎、上原方立、小崎弘道、由布武三郎、市原盛宏、大星武雄、岡田松生。中列向って右より：大島徳四郎、下村孝太郎、蔵原維廓、金子富吉、辻豊吉。後列向って右より：和田正修、浮田和民、古庄三郎、宮川経輝、林治定、海老名喜三郎、森田久萬人、赤峰瀬一郎、加藤勇次郎。

「偕^さて右の志道者一同は四月三日ヂェーンズよりバプテスマを受け、又聖餐式をも守った。熊本洋学校に信徒の起つた評判が世間に伝はるや、第一に来訪したのは長崎に居た英国監教會の宣教師モンドレルで、彼は一同にバプテスマを施したいと望んだが一人も応ずる者がなかった。次にはレフオームド教會の宣教師スタウト博士と同伝道師瀬川浅君に兩人が同じく長崎より来着した。彼等は多少ヂェーンズと縁故の



11 ジェーンズ一家 (明治 21 年撮影)

ある人であつたけれど、ヂェーンズは其頃既に京都同志社の新島襄氏やデビス博士の事を聞き、殊にデビスが元軍人であつたことより何となく懐しく思ひ彼と通信をして居り、私共有志を同志社に送らんとの意を決したのも其為であつたから、デビスに相談し其賛成を得て自ら平信徒にてありながらバプテスマと聖餐を施したのである」

モンドレルの授洗の勧めを拒み洗礼無用論を唱えていた宮川経輝も、按手札を受けていないジェーンズから受洗することを望み、小崎弘道もジェーンズに信仰告白をして奉教の意を表明し受洗したのである。

その後、奉教を貫いた者の多くが、ジェーン

ズの周旋によって新島襄が主宰する同志社英学校へと進んだ。熊本から乗り込んだ英傑の一人は、創設間もない同志社の基幹をなし、後に熊本バンド（結盟）と呼ばれた。熊本バンドは札幌・横浜バンドと共に三大バンドとして、日本プロテスタントの源流の一つとなった。

一八七六（明治九）年八月、熊本洋学校二回生が卒業し、同時に三回生も繰上げ卒業となり、洋学校は五年で廃校となった。ジェーンズは招聘の期限が切れ、一〇月七日、大阪英語学校外国語教員として赴任するため熊本を離れた。

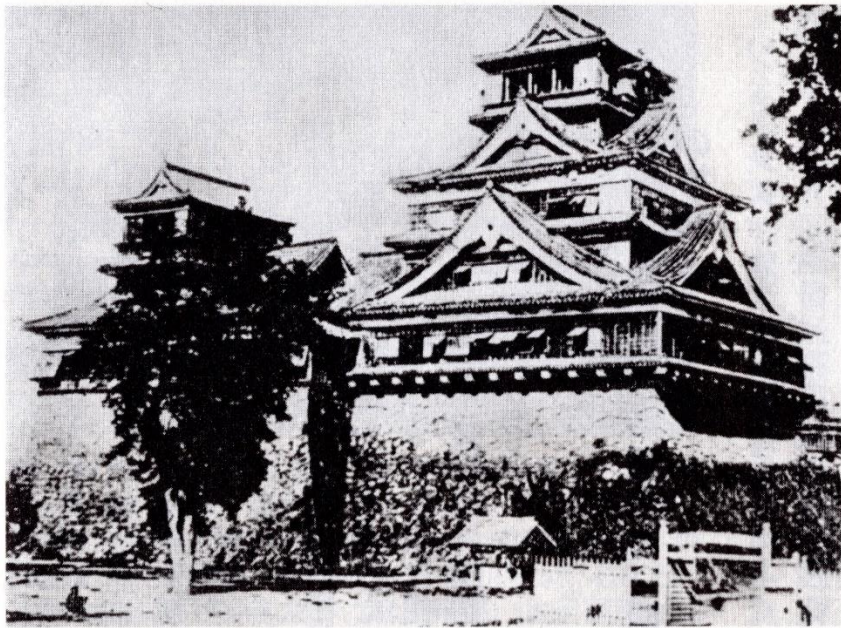
七 花岡山結盟と神風連の乱、明治維新期の終焉

ジェーンズが熊本を去った直後の一八七六（明治九）年一〇月二四日、神風連の乱が起こり、熊本城下は騒然となった。肥後勤王党の流れを汲む敬神党（神風連）の太田黒伴雄、加屋霽堅ら一七〇人余りが蜂起し、熊本県令・安岡良亮、熊本鎮台司令官陸軍少将・種田政明らを襲撃、殺害したのである。間もなく態勢を立て直した鎮台兵によって撃退され鎮圧されたが、神がかり的な復古主義・攘夷主義に固執し高じて決起した事件であった。

渡瀬常吉は『海老名弾正先生』（前出）「第七章、四 花岡山上の結盟」で、花岡山の結盟と神風連の乱の二つの事件について、こう記している。

「日本に於ける基督教の歴史中、花岡山上の結盟ほど麗しくも、亦颯爽たるものは少ない。十ヶ月後に勃発した神風連の暴動と、此の結盟とは同じ熊本に出現した対蹠的な現象である。一は進歩的な宗教の雄叫びであり、一は保守的な宗教の維新改革への反抗である。一は青年の靈火であり、一は老年壮年打つて一丸となれる爆弾である。一は西洋人に關聯したれども愛国志士の意気を蔽した運動の端緒であり、一は鎖国攘夷の終幕を飾る宗團の快挙である。両者各々観る處を異にしたれども、其の胸底の深處に閃入せんか、又互ひに感発するものなきにあらざりしならん」

宗教的な信条は全く異にするが、両者とも日本国家の将来を憂い、その熾烈な宗教的熱誠が発露したものであった。神風連の乱については、石光真清が手記『城下の人』の「神風連」で詳しく回想している。また、木下順二は、最初の戯曲『風浪』で神風連の青年群像を作品化している。



12 炎上前の熊本城(明治9年撮影)

明治七年、下野した参議・江藤新平が「佐賀の乱」を起こすと、九年に勃発した「神風連の乱」から飛び火するように、「秋月の乱」(福岡県)、「萩の乱」(山口県)と士族の反乱が続発した。明治六年の征韓論政変後、下野して鹿児島に帰り、私学校(私設軍隊)を設立していた西郷隆盛が、明治一〇年二月挙兵し、

西南戦争に発展した。熊本鎮台司令部が置かれた熊本城は西郷軍に包囲され、城下には火が放たれて市街は焦土と化した。二月一九日には天守閣が炎上し、実学党政権の改革綱領に掲げられていた熊本城取り壊しは、凶らずも実現した形となった。
石光真清は『城下の人』の「熊本城炎上」で、その様を鮮明に記している。

「慶長十二年、清正公の手によってお城が完成されて以来、二百有余年の間、私達の先祖代々が、この城下に生まれ、この城を仰いで育ち、この城を守り、この城と共に栄えてきたのである。そして、自分達の宝として誇り、藩主細川公の居城として尊敬してきた名城ではないか。一朝にして焼尽して行くのを目前に見て、嘆き悲しまない者は一人としてある筈がない。(中略)

城下の火事はますます激しくなって行くばかりであった。

夕方になると、猛火は殆んど城下全体に拡がって見渡すかぎり一面の火の海と化した。土蔵の爆発する音でもあろうか、波を打つ火焰かえんの海の中から、時々どどんと、山崩れのような遠鳴りに似た響が伝わって来る。私は父と共に、

庭の築山の上に登って茫然と火の海を眺めていた。

『五十四万石のご城下もこれで終りだ。今夜一晩で一面の焼野原になってしまおう。二百何年になるかな……繁栄を誇ったのも夢になった。時代の移り変りというものは……わしらが考えていたより、はるかに激しい……この様子では、正三⁽²⁰⁾、世の中はもつともつと激しく変わゆくぞ、覚悟は出来ておろうな』
父は心底から嘆くように言った⁽²¹⁾』

九月二四日、城山での西郷の自刃によって薩軍は全滅し西南戦争が終息すると、維新期の激動の時代から自由民権運動の時代へと、世相は大きく移って行った。

(ふじもと まこと)九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長)

【注】

(1) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』(一九六一年三月三十一日発行、新教出版社)二六頁。

(2) 隅谷が引用している箇所は以下の通り。

「旧政府により、体制維持のために特別に保護された朱子学とは異なり、陽明学は進歩的で前向きで可能性に富

んだ教えでありました。／陽明学とキリスト教との類似性については、これまでも何度か指摘されました。そんなことを理由に陽明学が日本で禁止同然の目にあっていました。『これは陽明学にそっくりだ。帝国の崩壊を引き起こすものだ』。こう叫んだのは維新革命で名をはせた長州の戦略家、高杉晋作であります。長崎ではじめて聖書を目にしたときのことでした。そのキリスト教に似た思想が、日本の再建にとつては重要な要素として求められたのでした。これは当時の日本の歴史を特徴づける一事実であったのです」(内村鑑三著・鈴木範久訳『代表的日本人』一九九五年七月一七日発行、岩波文庫)一九頁。

(3) (1)の二七頁。

(4) (1)の二八頁。なお隅谷三喜男は、久山康編『近代日本とキリスト教「明治篇」』(昭和三十一年四月五日発行、創文社)の「第一章 明治維新とキリスト教『儒教よりキリスト教への転換』」の対談(六六～六九頁)で、次のように発言している。

「……儒教のいわば発展というか、完成というようにキリスト教を見る。ですからそういう意味ではキリスト教を儒教的倫理の延長と見、非常に倫理的に理解していて、自分たちが儒教の世界で知っていた倫理よりも、もう一段深い倫理的な世界というものがそこにあるというので、キリスト教に移行するのです。だから当時の小崎弘道や松村介石などの自伝を見ますと、自分たちが儒教からキ

リスト教になったのは、キリスト教の中に儒教の完成を見たからだというようなことを言っていますね。たとえば松村介石は回心の事情を『耶蘇教の所謂の神とは、即ち儒教の所謂の天帝、上帝、皇天ではないか、されば汝は幼少時代より此の神の存在を信じていた筈だ』というように書いています。……」

「ですから儒教の中で天という概念を重要視したということで、陽明学がキリスト教受容の一つの媒介になっていきますね」

「天というとまだ人格的でないから、天帝とか上帝とか云って人格化したわけですよ」

(5) 「」の部分は、文脈を踏まえ隅谷が補ったもの。

(6) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』(昭和一三年二月二五日発行、龍吟社)・一六 如何にして基督者へ」の九〇、九二頁。

(7) 日本組合熊本基督教会(現・熊本草葉町教会)発行『ともしび』所収の「熊本バンド信教の由来」(昭和一一年一月発行、第七八号)の中で、海老名弾正は次のように述懐している。

「小楠は朱子学で満足せず陽明学を学び朱子学の科学的で理窟的研究的なのに陽明学の生き生きした直感的な所を加へてゐる。(中略)天は理なりではいかぬ活物なりとの語は私に深い印象を与へた。小楠は陽明に止まらず朱子を棄てず孔孟に更に堯舜に即ち書経に入った。それ

にも満足せず終に天に入りました。小楠は天言レベレシオンを聞きたいと言つて居た。斯く肥後の儒教は書経迄行つてゐる。之と洋学校の熊本バンドとの関係であるが多くの人は十中十迄ゼーンズ先生の感化と考へてゐるが、強ちにさうではない。(中略)如何して斯うなつたかと言ふと儒教を学んでゐた結果です。之を深く学ぶにつれて問題となつたのは天です。小楠の天は活物なりとの言です。之を突きとめんとしたのです。(中略)即ち吾々と天帝との間に密接な関係を見たのです。吾々の心の中に天の姿があるのです。儒教の上帝はやがて基督教の新しい体験の中に天を親として崇める様になり、中江藤樹の眞の親を見出し儒教の教へた親が新に基督教の親に代つて来たのです。もし今私の儒学の先生方が御居になるなら、私の信仰体験を残らず申し上げませう。きつと認めて下さる事と思ひます。小楠が殺害されたのは彼がヤソであるとの誤解のためでした。小楠が基督教を知つてゐたかと云ふには少しは知つて居りましたでせうが、私の体験した如き事は知らないのです。しかし彼の儒教の立場は高尚な所に立つてゐます。もし当時のクリステイアンが地獄に入らぬ為とか安心立命を得たいとか云ふ考へならば、小楠の方が一枚上手でありましたでせう。神を信ずるのは神のごとくなりたいのです。之には儒教の人々にも異論はないのです。私は儒教の恩を被り、儒教に育てられたのです。之は私は代表者の一人として

云ふので相談も何もせずあきらめたが、同じ想だつたのでせう。熊本バンドは此の精神です。此の神に近づく精神が基督教です。基督教に最も強く此の精神があらはれてゐるからです。名前はどうしても良いのです。之を儒教と言ひたければ儒教と云ふても良く、此の精神の境涯を私共の同胞兄弟に分ちたい、之が私共の行くべき所と考へたのであります」

土肥昭夫は『日本プロテスタントキリスト教史』（一九八〇年七月三〇日発行、新教出版社）・第五章「明治期の神学思想」で、海老名弾正の神学思想について次のように批判している。

「彼はキリスト教と儒教の間に共通な宗教的意識を見出し、それによつて儒教をキリスト教の中に摂取包括し、そこから儒教の進化発展とキリスト教による完成成就を考えた」（一七六頁）。しかし、「このような海老名の見解は、結局イエス・キリストという神の啓示の一回的な独自性を解消してしまうことになるだろう。このようになつた一つの原因は、彼がキリスト教の教理の理解において、儒教的な思考方法を脱却していないところにある、と思われる。儒教においては天理、上帝の超越性と内在性が連続的にとらえられ、天理ないし上帝即自然の物理（理気の結合）即人倫の道理（五倫五常の道）とされている。このような東洋的自然主義の思考方法が海老名の中にも反映した。彼は神の超越性と遍在性を説くが、前

者は後者の中に摂取包括されていく。また父子有親の理が、神、キリスト、人間をつらぬく宗教的倫理的意識として連続的に結び合わされている。したがつて神のキリストにおける一回的な歴史的啓示はその固有性を解消し、人間一般の道理として合理化されてしまつてゐる。キリスト・イエスは主また救い主ではなく、万物に遍在する天理を宿す人間の内在的本性を明らかにし、天理と合一することを実現した一宗教的人格に過ぎなくなる。ここに海老名の自由主義神学の基本的問題があつたのである」（二七八頁）

(8) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』第六章「七 霹靂一響」
九五〜九七頁。

(9) 同右書、第七章「二 師友間の靈潮」一〇一〜一〇二頁。

(10) 加藤清正が築城の時、合図のために釣鐘を懸けた松と伝えられているもので、現存していない。

(11) 小崎弘道『七十年の回顧』（昭和二年四月五日発行、警醒社書店）・第一章「幼年時代・六 基督教の研究」一八頁より。旧漢字体は現漢字体に改めた。

(12) 『近代日本の青年群像 熊本バンド物語』（竹中正夫編、三井久著、一九八〇年六月三〇日発行、日本YMCA同盟出版部）・一〇「花岡山の結盟」より。花岡山頂の誓約の日については、奉教趣意書には一月三〇日誌すと記されているが、一月二九日の説もあり定かでない。海老名は前日の二九日に誓約したと述べている（渡瀬常吉『海

老名弾正先生』一一〇頁)。

(13) この原本は、後に同志社教授となった森田久万人が保管していたので、現在同志社大学社史資料室に所蔵されている。『新熊本市史 史料編 第六巻 近代I』(一九九七年三月三〇日発行)には巻頭口絵に写真版が掲載されている。また、活字化された全文も収録(二〇四一頁)されている。本誌では、原文に適切なルビ(読み仮名)と句読点を施した。

(14) 徳富健次郎『竹崎順子』(大正一二年四月二二日発行、福永書店)、「遠山参良先生蔵書遺本」(九州学院所蔵)にあった初版本の二二四〜二二五頁から引用。

竹崎順子は横井小楠の妻・つせ子の姉であり、小楠の高弟・竹崎茶堂に一六歳で嫁し、茶堂が藩政改革後の明治六年、藩庁を辞して日新堂を創設すると、順子も教育に携った。茶堂死後の明治二〇年、受洗し、キリスト教徒となり、明治三〇年には熊本女学校の校長に就任。熊本の女子教育の先駆者であった。

(15) 父・横井小楠が京都で暗殺された後、息子・時雄は、その恥辱のため横井姓を名乗ることをはばかって、伊勢時雄と称していた。

(16) 吉田作弥(後にキリスト教に回心、同志社に学び熊本バンドの一員となり、神戸女学院副院長)を大将に、横井時敬(農学博士、東京農業大学長)、岡田源太郎(同志社に学び熊本バンドの一員となる)、郡徳隣(後に海老名

弾正より受洗)などを中心とする三六、七人であった。

(17) (11)の二二〜二三頁。旧漢字体は現漢字体に改めた。

(18) 石光真清は、熊本洋学校二回生・石光真澄(エビスビル会社支配人)の弟で、一生の大半をシベリア、満州での諜報活動に従事し、その波乱に富んだ人生を、『城下の人』、『曠野の花』、『望郷の歌』、『誰のために』の手記四部作に記した。

(19) 「人間」(昭和二三年三月初出)。「明治維新激動期の熊本を舞台に、苦渋にみちた模索のち西郷軍へと身を投じる佐山健次と、彼をめぐる青年群像を描いた処女作」(岩波文庫)だが、作品中にはジェインズ夫妻や横井時雄(小楠の長男)を想わせる横井歳男などが登場する。

(20) 正三とは真清の幼名で、四歳時にジフテリアから快癒した際、生誕時の名・忠三から正三に改名されていた。

(21) 石光真清『城下の人』(昭和三三年六月一五日発行、龍星閣)・「熊本城炎上」七三〜七五頁。

※写真・画像資料1・4・9は九州学院所蔵、3・10・11は小崎弘道『七十年の回顧』(昭和二年四月五日発行、警醒社書店)より、12は石光真清『城下の人』(昭和三三年六月一五日発行、龍星閣)より。